道普請人ウガンダでの活動報告

埼玉大学工学部　環境社会デザイン学科 4 年
土井爽詩

1.　はじめに

道普請人様のことは土木学会が主催していたイベントを通して知りました。主に途上国の農村部において、様々な可能性を持つ 「道」というインフラを、「現地のニーズ」に基づいて、「自らの手で」直していく。この活動には、ただ道を直すこと以上の意味があると感じました。土のうというシンプルな材料によって、道を直し、道によって様々な場所へのアクセスを可能にすること。このような持続可能なサイクルによって、現地に住んでいる方の可能性が広がっていく仕組みに感銘を受けると同時に、そのサイクルの規模を広げ、長く継続していく必要性を感じました。

また、自分は今後大学院に進学し、日本国内で数年間働いたのちに、世界規模で仕事のできるグローバルなエンジニアになりたいと考えています。土木という分野で、途上国という環境で、道普請人という団体で、ニーズに即したボランティア活動をするという経験が、自分にとって未知の世界に足を踏み入れる第一歩となり、途上国で仕事をする上で求められる気持ちや意識の持ち方を学ぶことを目標に掲げながら、活動に臨みました。

2.　活動内容

「ウガンダ北部における道路インフラ整備・地域の緑化を通した強靭なコミュニティづくり」というプロジェクトのもと、令和 4 年度日本 NGO 連携無償資金協力の中で活動を行いました。

写真 1　座学の様子

具体的な活動内容としては、土のうを用いて農村地域の道路の道直しを行うといったもので、全 20 日間の実習のうち、最初の 2 日を土のう工法に関する座学（写真 1)、その後の期間は現場での作業に当たりました。2 か所の道路（240m,300m）の近くに住む現地の方々50 人（訓練生）とともに作業を行い、合計で 540m の道直しを行いました。現場では、道普請人のエンジニアの方が作業を実践し、訓練生全員で役割分担しながら作業に取り組みました。(写真 2,3)

写真 4,5 は、20 日間の作業の開始直後と終了間際の様子を比較したものです。周囲の草刈りから始まり、雨水を流すための水路を道路の両端に作り、マラムという現地の土を用い

写真 2 現場でのレクチャーの様子

た土のうの作製、設置、ハンドランマーによる転圧、さらにマラムを覆いかぶせ、ペデストリアンローラーを使用したあとの状態が写真 5 になります。

どの作業工程も専門知識を必要とせず、とても分かりやすいものではありましたが、肉体的にはかなりハードな作業でした。にもかかわらず、現地の訓練生はよく働き、休憩を挟みながら作業に取り組んでいました。大変なこともたくさんありましたが、完成した道路を見渡した時に感じた達成感は忘れられません。

写真 3 土のうを敷き詰める様子

写真 4 作業開始直後の現場の様子

写真 5 作業終了間際の現場の様子

3.　獲得目標と成果

大目標：人々の暮らしを守り、豊かにする「土木」という分野の国際的な発展に貢献する

中目標：グローバルエンジニアに求められる価値観や考え方を実感する

小目標：自分がこれから働こうとしている環境で、現地の人とともに草の根活動に取り組む

写真 6 現場で作業する様子

小目標~中目標にかけて達成できるように心がけながら活動を行いました。学生ボランティアという立場でありながらも、現地の方々に対してエンジニアのような立場で指示を出したり、時にはひとりの訓練生としてともに作業を実施したりしながら、草の根活動に取り組むことができました。

作業中や休憩中に現地の方とコミュニケーションをとる中で、実施している作業の意義や、活動に参加する理由などについても話をすることを意識していました。その中で「現地の人々はなにを望むのか？」という問いに対し、ひとりひとりから生の声を聞くことができ、一筋縄ではいかない国際協力というものに対し、関わる人全員のメリットを最大化しながら、成果を追求していくことの難しさを実感しました。

誰にどんなメリットがあり、それは持続可能なものなのか。また、その活動に必要な資金はどこから来るのか。様々な場面で「バランス感覚」をもって活動を進めることの重要性を実感しました。

4.　感銘を受けた体験と感想

“We need your talent”

実習中、現地の方と話していて印象に残った言葉です。自分がウガンダに滞在している間、日本人が盗難被害にあったり、日本人のエンジニアが襲われたりする事件が何件か発生していました。それをとある現地の人に話してみたところ、「エンジニアを襲うような人は、目先の利益しか考えていない」という趣旨の発言をしていました。エンジニアは、ウガンダという国に発展をもたらしてくれる。いまの自分たちには持っていないような技術と才能で、国を導いてくれる。私たちを豊かにしてくれる。だから、私たちにはあなたたちの才能が必要なのだ、ということを話してくれました。

その言葉を聞きながら、自分の実習中での活動を振り返りながら、自分が訓練生の方々に対して提供できたものはあったのだろうか、いまの自分は「日本人エンジニア」に値するほどの知識と経験を持ち合わせているのだろうか、と自分に問いかけていました。

その日の作業が終わったとき、改めて自分にできること、提供できるものの小ささを実感すると同時に、国内外で経験を積み、知識を得たうえでまたアフリカという地に、エンジニアとして戻ってきたい。この地に住む人々の豊かな暮らしを支えたいと思いました。

5. 実習を終えての今後の取り組み

専門知識と現場で使える英語力を身に着ける。土木という分野で構造物を建設し、豊かな暮らしを支えるためには、想いだけではできることに限界がある。自分がいま大学で学んでいること、これから大学院に進んで研究することによって得られる知識をもち、一人の専門家としてアフリカという地域に携わりたい。実習を終えて改めてそう思うようになりました。現時点でも取り組んでいる大学での卒業研究に対し、今できる最大限の力で向き合っていきたいです。

写真 7 同世代の訓練生との写真

加えて、実践的な英語力の必要性を痛感しました。あいさつや会話程度のコミュニケーションをとることに抵抗は少なくなりましたが、自分の考えを伝え、問題解決を目指していく議論の中で、手段として用いる英語を扱う力が足りていないことを痛感しました。自分の考えを英語で伝え、相手と議論を重ねながら合意形成をしていく。そのような経験ができる場所を見つけ、これからも伝える手段としての英語力を磨いていきたいと思います。

6. おわりに

（帰国前、ウガンダ滞在最終日に残していた記録をそのまま書き写します）

現地駐在の岩村さんはじめ、みなさんに本当に感謝したい。いろいろなものを受け取ってばかりで恩を返しきれない。自分があの場にいた価値とは何だったのだろうか。CORE の職員の方々、現地の訓練生に自分が与えられた影響はあったのだろうか。無かったわけではないが、それを追い求めるには 1 か月という期間はあまりにも短かった。

関わったすべての人への感謝が溢れてくる。自分が受け取ったものを別の形でより多くの人に還元していきたい。そう強く思った。自分にできることの限界を痛感した。エンジニアとして、一人の日本人として、たくさんの人の豊かな暮らしを支えるために、土木という分野での自分の影響力をより大きなものにしたい。グローバルなエンジニアとして、世界で活躍することが、今回関わったすべての人への恩返しだと思う。

I learned and experienced many things thanks to all of CORE staff. If I have one more year free time, I would have stayed here. I enjoyed whole time in Uganda, sometimes as a tourist

from Japan, sometimes Japanese engineer, sometimes local trainees.
I am sure I will never forget memories, hard work, local food, Sanyu (local food restaurant), national park, mosque and so on. and I have a feeling I will be back in Africa. I want to work as an engineer in Africa in my future. Thank you for everything.

改めて、今回携わったすべての方々に感謝したいです。ありがとうございました。